

# 〔73〕熊川哲也2005 スターとして、演出家として

## ～『放蕩息子』他を観る～

2005年9月24日 東京新聞 夕刊

熊川哲也の存在で初めてバレエに興味が湧いたと言う人が大勢いる。

クマテツって、そんなに跳ぶんですか？  
いやになるほど何度も聞かれた。

たしかに熊川哲也の跳躍は見事である。いつ見ても、胸が晴れる思いがする。しかしそれだけが彼の本領というわけではない。

熊川哲也のほんとうの凄さは、才能が宇宙ロケットのように何段階にも開花する点にある。ダンサーのテクニックをバネにスターのキャリアを展開し、トップスターとしての華を芸術監督の大きさへと昇華させ、行く手を明晰に見定めながら、計画を着実に実現していく知力と気力を持っている人なのである。

Kバレエ・カンパニーを創立してからたった五年で、自身のカンパニーにますます磨きをかけるいつぼう、『白鳥の湖』『 Coppélia 』『ドン・キホーテ』と古典の大作バレエを次々に改訂して、展開の鮮やかな熊川流の演出手法をすっかり自分のものにしてしまった。

# 〔73〕熊川哲也2005 スターとして、演出家として

## ～『放蕩息子』他を観る～

2005年9月24日 東京新聞 夕刊

なにしろ新作を出す度に、どんどん手際よく、面白くなるのである。

民間のバレエ団なのに日本一の公演回数を誇り、それに見合う数の観客を動員してきたというのは、ただごとではない。

そしてこの八月、熊川哲也は三本立てのプログラム「トリプル・ビル」の最後を締める演目として『放蕩息子』を踊った。

『放蕩息子』は新約聖書のルカ伝にある挿話をもとにバランシンが振り付けたバレエである。バランシンといえばストーリーのないシンフォニック・バレエで知られるが、『放蕩息子』は彼が若い頃バレエ・リュッスで作った物語性の強い作品。異色のバランシンとしても興味深く、プロコフィエフ音楽で有名な画家ルオーの美術という、いかにもバレエ・リュッスらしいインパクトの強い道具立てでも注目に値する。が、とりわけ主人公を主張の強い人物として描いているためにカリスマ性のあるダンサーでないと踊り切れない。そ

# 〔73〕熊川哲也2005 スターとして、演出家として

## ～『放蕩息子』他を観る～

2005年9月24日 東京新聞 夕刊

のために、いわば特権的な作品と見なされてきた。天衣無縫で怖いもの知らずの息子の性格を表現するためにアクロバティックなテクニクが要求されることや、いったん外へ飛び出した主人公が父の国に戻るといふ筋書きも、熊川哲也に似つかわしい。

しかもこれは主演スターの力量だけでなく、バレエ団の技術水準や演出の手腕が問われる作品でもある。Kバレエ・カンパニーの総帥、兼トップスターにとっては、これまで手がけた多方面の活動の集大成になるにちがいないと期待されていた。

それにしても鮮やかな出来映えである。火花のように凝縮し炸裂するヒーローの演技もさることながら、メリハリの聞いた展開に躍動感があつて次へ次へと引き込まれ、こんなに短い作品なんだ…、と終わったのが残念だったほどだ。

印象的だったのは熊川演ずる息子の演技（＝解釈）が、豪快でありながらとても純真で無

# 〔73〕熊川哲也2005 スターとして、演出家として

## ～『放蕩息子』他を観る～

2005年9月24日 東京新聞 夕刊

邪気なこと。彼が役の中でこれほど気取りを捨てて無心なさまを見せたことはかつてなかった。

息子を誘惑するサイレーンを踊った中村祥子（現在ウィーン国立劇場バレエ団）も大らかで艶やかな好演だった。しかし最近のKバレエ・カンパニーは女性舞踊手が複数で競演するのが趣向の一つになっている。同じ役も他のバレリーナが踊ればまた色合いを変えるだろう。それを見比べるのも楽しみである。

三本立ての最初に上演された『パッシング・ヴォイス』が予想を上回って良い仕上がりだったのも、おまけの喜びだった。初演から成長を見てきたが、まず一つのアイデアがオリジナルなフレーズで始まり、それがスタイルを変えながら展開して多重化し、ある恋の物語を感じさせるまでに膨らむこの作品に、一つの萌芽を情熱をもって育てて着実に開花させた熊川のバレエ人生を見る思いがした。